

2021年2月14日・佐土原キリスト教会・礼拝メッセージ**聖書箇所：ヨハネ福音書 15章 11～17節****説教題：神の使命に生きる祝福**

小学校に勤めていた時にある先生から聞いた話です。1人の男の子が忘れ物をしました。彼は、よく忘れ物をする子でした。先生も、「またかっ！」と思って叱ろうとしたけど、ぐっと我慢して、「どうすれば魂が入るか」、それを考えて取りに帰すことにしました。「叱らないけど、家に取りに帰って来なさい。取りに帰れるか」。彼は、「叱られる」と思ったのに、思わぬ優しい言葉に喜んで、「はいっ！」と言って一目散に家に帰ったそうです。しばらくして、彼の家から学校に電話がかかって来ました。お母さんが先生に言いました。「家の子供が忘れ物を取りに帰って来ましたが、何を取りに帰ったのかを忘れてしまっているので、教えてもらえませんか」。

私達も、自分が何をどのように言われて歩いているのか、それを忘れてしまうことがあるのではないのでしょうか。そのような意味で、今日の箇所は「私達は何を期待されているのか、神様は私達に何を願っておられるのか」、そのことをもう一度教えてもらえる箇所です。

イエス様の「告別の説教」が続きます。前回は「ぶどうの木」の譬を通して「信仰の成長」について語って下さいました。自動車の運転でも何でも、初めのうちは、楽しむ等という余裕はありません。しかし少し上達してくると、運転を楽しむことが出来るようになります。信仰生活においても、成長して行くと信仰生活の深い喜びが分かる、そういう面があるのではないのでしょうか。それでイエス様は 11 節で「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです」(11)と、「私の経験している喜びで、あなたがたの喜びが満たされるために話したのです」と言われたのだと思います。信仰生活は、基本的に「喜びの生活」なのです。それは「ワッハッハ」という喜びではないかも知れない。しかしそれは、私達を希望に生かす、深いところから湧き上がる、尽きない喜びなのです。今日の箇所でイエス様は、私達の信仰生活の喜びについて一歩話を進めて行かれます。それは「使命に生きる喜び」ということです。

イエス様は言われます。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです」(12)。イエス様は 17 節でも、念を押すように同じことを言っておられます。「キリスト者とはどういう人か」と問われたら、「それは互いに愛し合う使命に生きている者だ」ということになるのではないのでしょうか。そして使命に生きることは、喜びではないのでしょうか。教員になって最初の1年は、失敗の多い、酷い1年でした。そんな時に事務の先生が私に「焼却場の看板の文字を書いてくれませんか」と言って下さいました。私は、美術関係は好きでしたので、「明朝体で書けば良いですか」と言って引き受けました。毎日、昼休みになると、物置のような場所に行って、木の表札にペンキで文字を書きました。「あなたにこれをやって欲しい」と言われて、それをやって行く、少し出来ると褒めてもらえる、それは私の喜びになっていました。「あなたにこれをやって欲しい」と言われて、それをやって行くことは、喜びだと思います。その意味で、イエス様の使命に生きることは、喜びなのです。

しかも、ここでイエス様は「これがわたしの戒めです」(12)と、「こうしなさい」と強く言われました。私達が、具合が悪くて医者に行ったとします。お医者さんが症状を診て、この薬を飲めば治る、この食事療法が必要だ、という時には、「よかったら、この薬を飲んでみたらどうでしょうか」等とは言いません。そんな処方では患者が困ります。そうではなく「この薬を飲みなさい、こういう食事療法をしなさい」と確信と愛情を持って言うでしょう。「これがあなたのためなのだ」ということです。イエス様の強い口調も同じです。「あなたがたも互いに愛し合いなさい」、「愛に生きることが、あなたがたのためなのだ、あなたの喜びが増し加わるためなのだ」と、イエス様は確信を持って言われたのです。だから、11節、17節、そして13章34節でも「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(13:34)と言われたのです。私達は、何のために生きているのか、何を使命に生きて行くのか、それを見失わないようにしたいと思います。

しかし、ここで考えなければならないのは「わたしがあなたがたを愛したように」(12)という言葉です。「イエス様の愛で愛しなさい」と言われているのです。私達の愛は、どういう愛でしょうか。ある人が言っていました。「私はね、家内が良くしてくれるときは愛することが出来るけど、良くしてくれないときは愛することが出来ない」。当たり前のことのように思いますが、なぜ「奥さんが良くしてくれないときは愛することが出来ない」のでしょうか。それは、愛の関係の中心に、自分というものがデーンと居座っているからではないでしょうか。自分を中心とした愛だから、自分が満足出来ないときと愛せない、ということなのではでしょうか。「聖フランシスコの祈り」に「神よ…愛されることよりも、愛することを望ませて下さい」という言葉があります。しかし私達の愛は、「愛する」ことを願う愛ではなくて、「愛されること」を願う愛なのかも知れないと思うことです。

人間の愛で最も神の愛に近い愛は、「親が子を思う愛」だと言われます。ある方がポツリと言われました。「親は子のためには何でもするのにね」。そうなのだと思います。つまり、親が子を思う愛は、「与える愛」、「愛する愛」という意味で神の愛に近い愛なのだと思います。ですからイエス様が「わたしがあなたがたを愛したように愛し合いなさい」と言われるのは、「自分を中心とした愛、愛されることを願う愛ではなくて、相手にとっての最善を願う愛で、関わって行きなさい、交わりを作り上げて行きなさい」ということではないでしょうか。

しかし、これは難しい、なかなか出来ないことです。私の愛も、いつも条件付きです。時には「恨みや憎しみを抱えた愛です」。だからこそイエス様は、愛において弱い私達に3つの励ましを語って下さいます。

1つ目は13節です。「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません」(13)。この言葉を読むと、「そんな愛は、私にはありません」と下を向いてしまいそうですが、イエスは私達に「あなた方も友のために死ぬほどに愛しなさい」と言っておられるのではないと思います。そうではなくて、「イエス様が十字架にかかってまで私達を愛して下さい」ということが言われているのであり、ポイントは「あなた方は、そのような愛で愛

されているのだよ」ということです。

私達は、神の御手の中で、神に希望を持って生きて行けることを喜んでいますが、また、やがて私達は皆、必ず地上の生涯を閉じますが、死は滅びへの入り口ではなく、素晴らしい喜びと祝福への入り口となった、ということを楽しんでいます。しかし、私達はその素晴らしい祝福に与るために、イエス様は、あなたのために(私のために)死んで下さったのです。死ぬほどの愛で、愛して下さったのです。今も、その愛で愛して下さっているのです。だから「あなたもそんな大きな愛を受けているんだよ。だから、あなたも愛に生きて行きなさい」、それがここで言われていることなのです。ある教育の本に「愛されたことのない子は、愛することを知らない」と書いてありました。私達は、愛された者なのです。だから愛することを知っているのです。だから「あなたも愛に生きて行きなさい」とイエス様は言われたのです。

2つの目の励ましは14節です。「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です」(14)。私達がイエス様の戒めに生きる時、イエス様は私達を「友」と呼んで下さると言うのです。一見、何でもない言葉のようですが、大変な言葉です。「旧約」の人々は、「神のしもべ」と呼ばれることさえ名誉として喜んだのです。それほど神様は、畏れ多い方だったのです。そんな「旧約」の中で「神の友」と呼ばれた人がいます。それは「旧約」最大の出来事である「出エジプト」を導いたモーセです。聖書にこうあります。「主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた」(出エジプト 33:11)。不信仰なイスラエル人を、大変な困難を経験しながら導いて行ったのがモーセでした。そのモーセに対して神は、「友と語るように」接せられたというのです。「神の友」という特権は、「旧約」の長い歴史でもモーセだけに与えられた特権です。その特権を、イエス様は私達に下さると言われるのです。私達も、あのモーセだけの特権に与ることが出来るのです。先日お送りした「お便り」の中でご紹介したレーナ・マリアさんはこう言っています。「人生の中で困ったことが起こった時、すべてに信頼のおける方を、私は知っています。それは私の最高のお友達、イエス・キリストです。私は寂しいとき、イエス様に祈りながら、心の中にあるどんなことでも打ち明けています…」(レーナ・マリア)。私達の頂いている特権を良く教えてくれる言葉です。また、3年前に「信徒大会」でご奉仕下さった横山幹雄先生はこう言っておられます。「私を友と呼んで下さる。そんなイエス様を知ると、心が熱くなる。こんな私を？ 自分でも自分が嫌になり、友と呼ばれる資格のない、恥ずべき自分なのに…。しかし主は『自分には資格がないと悟ることこそが、その資格なのだよ』と語って下さる。『あなたのその恥を、わたしが十字架の上で身代わりに受けたのだから』と」(横山幹雄)。イエス様に「友」と呼ばれることの恵みを教えられます。

いずれにしても、私達はそんな特権を与えられているのですが、さらに素晴らしいのは、「あなた方は友だから、父の御心を教えよう」と言って語って下さったのが、16節の言葉です。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり…」(16)。

「『あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選(んだ)』、これは

神様の深い御心なのだ」と教えて下さったのです。そして「神が選ばれたあなた方だから、実を結ぶことが出来る」と言っておられるのです。私達もイエス様の愛を受け取り、励ましを受け取り、神の深い御心に支えられて、きっと愛に生きることが出来るのです。

3つ目の励ましは16節です。「あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです」(16)。実際問題、私達が愛に生きることが難しいことを、イエス様は知っておられました。だから「愛に生きることが出来るように、その力を求めて祈りなさい、神様がその力を与えて下さいます」と教えて下さいました。私達は、愛において弱いのです。弱いから、自分の力で愛そうとするのではなくて、神様に力を頂かなければならないのです。そのためには、祈ることです。祈りを通して、私達は神様に力を頂いて、与えられている素晴らしい使命に生きて行くのです。

天に帰られた姉妹が、以前言われたことがあります。「私達には『きょうよう』と『きょういく』が必要です」。それは「生活の張りのために『今日、用事があること』と『今日、行く所があること』が大切だ」という意味でした。今は「どこかに行く」ことは難しいですが、「愛に生きる、隣人を愛する」という大切な用事に生きることが出来ます。「誰にも会わない日がある」という場合もあるでしょう。でも「愛は祈りから」と言われます。愛に生きるために、誰かのために祈ることが出来ます。いずれにしても「愛に生きること」、それが私達に与えられている使命です。この使命から迷い出ず、この使命を生きて行きたいと願います。イエス様は、そこに喜びがあると約束して下さいています。